



経営安定レポート Vol.2

2年1作から1年1作へ

宮古島の南に位置する上野地区でさとうきび生産組合の組合長を務める川満長英さんは、様々な栽培方法を試みながら、サトウキビの生産性向上に積極的に取り組んでいる。年々規模を拡大し、現在は3品種（農林27号、25号、21号）のサトウキビ350㎡を妻のヨシさんと二人で栽培している。

同島のサトウキビ栽培の約8割は「夏植え栽培」と呼ばれる2年1作で、8月～9月頃に苗を植え、翌々年の1月～3月に収穫する。しかし2年1作では生産効率が悪いいため、川満さんは3年前から1年1作の株出し栽培にもチャレンジし、安定生産体制を整えつつある。

株出し栽培は春の収穫時に地を耕し、残しておき、その株を利用して翌年に収穫する栽培方法。毎年収穫できるメリットがあるが、同島では土壌害虫（幼虫）により、株から芽がでないという問題が発生したため株出し栽培が困難であったものの、農業の開発や管理方法の確立などにより「これからは生産

収量・糖度アップへ向けたサトウキビ生産生産性向上へ

沖縄県宮古島市 上野地区さとうきび生産組合 組合長 川満長英

温暖な気候と平坦な台地を利用し、サトウキビ栽培が盛んな沖縄県宮古島。しかし多発する台風や保水力に乏しい土壌、河川が無いなど生産地として不利な条件が多い。この条件の中様々な工夫で生産性向上と規模拡大に取り組んでいる川満長英さんにサトウキビ生産のこだわりを語ってもらった。



「今後の目標は担い手の育成と、機械化でさらに規模を拡大すること」と語る川満長英さん

効率的な良い株出し栽培に全て切り替えていきたい」と、川満さんは今後の株出し栽培に自信を見せる。

主作りで収量・品質アップ

「島尻マジジ」と呼ばれる、宮古島特有の土壌は保水力に乏しく干ばつの被害を受けやすい。そのため作物を育てるには適期かん水を行うのはもちろんだが土作りが重要になる。

川満さんは緑肥として沖縄由来種である下大豆（ゲダイズ）を畑に鋤き込んだり、ブラソライラー（深耕機）で深く耕すなど肥培管理を徹底して行っているため、化学肥料の使用を島平均の約半分にする。

抑えている。収穫作業は約半分を機械で、残りは手刈りで行う。重労働の手刈り作業時には息子や孫など家族総出で汗を流す。川満さんは「手間をかければかけただけ収量、品質が上がる」と話す。こうした取り組みにより川満さんの毎年の単収は、島の平均を大きく上回っている。また平成22年度農林水産祭では県内のサトウキビ農家として初めて内閣総理大臣賞を受賞し、県内外からも注目を集めている。

島を支える交付金

川満さんのようなサトウキビ生産者の収入は、独立行政法人農畜産業振興機構が交付する「甘味資源作物交付金」と製糖工場から支払われる原料代で成り立っている。川満さんは「島はサトウキビ生産で支えられている。交付金がなければサトウキビ生産者だけでなく島全体に影響が出る」と話す。砂糖の原料となるサトウキビ生産は、外国産との価格差が大きい。そのため、生産者の栽培技術向上への努力と交付金で支えられている。

事業Q&A 甘味資源作物交付金編

Q お料理やお菓子、清涼飲料水などに使われている砂糖。その原料となるサトウキビは、どんな地域で栽培され、どんな役割をしているのでしょうか。

A サトウキビは温暖な気候を好むもので主に沖縄県や鹿児島県の南西諸島で生産されています。離島は輸送に時間を要しますが、サトウキビから作られる砂糖は保存が効くので輸送に強く、野菜や果物などの生鮮食料などを生産するより島にとって有利な作物といえます。これらの地域は台風の常襲地帯で、強風にも耐えうる作物としてサトウキビは他に代えることができない作物です。

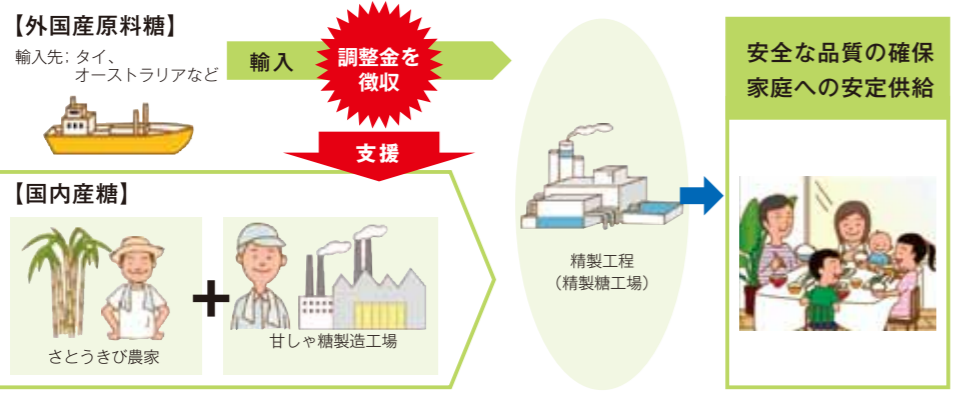
Q 砂糖の自給率や外国産との価格差を教えてください。

A 自給率は約3割です。また、価格差については国内産の砂糖は外国産と比較すると、甘しさと糖で約5倍の価格差があるといわれています。

Q 国内のサトウキビ生産者を支援する仕組みはありますか。

A 国内の生産農家は、生産規模の大きな外国で生産された砂糖と価格で競えるはずがありません。このため安く輸入される原料糖から徴収したお金（調整金）を主な財源にして、サトウキビ生産者に独立行政法人農畜産業振興機構（alic）から「甘味資源作物交付金」が交付されています。この交付金によりサトウキビの生産を続けることができます。

サトウキビは私たちの暮らしにとって必要不可欠な作物。砂糖の安定供給を図るため国内の砂糖産業を支えることが大事。



お問い合わせ先 特産業務部砂糖原料課 TEL03-3583-8960
 鹿児島事務所 TEL099-226-4731 那覇事務所 TEL098-866-1033